ポオとルヴェル

小酒井不木

青空文庫

私の一番好きな探偵小説は、短篇ではやはりポオとルヴェルである。ポオの作品のうち、探偵デュパンの出て来る三つの物語は勿論であるが、その外に、

The Black Cat.
The Cask of Amontillado.
The Fall of the House of Usher.
The Gold-Bug.
Hop-Frog.
Mesmeric Revelation.
The Oblong Box.
The Masque of Red Death.
The Premature Burial.
System of Dr. Tarr and Professor Fether.
The Tell-Tale Heart.
"Thou art the man."

など、いつ読んでも、読むたんびに新らしい感興が湧く。System of Dr. Tarr and Prof. Fether. の最後の部分の狂者(きちがい)たちの行動の描写に至っては、面白いというよりも自然と頭がさがるのを覚える。いずれ私は「犯罪文学研究」の中に、私のポオ論を書くつもりであるが、私はいつもポオより後の時代に生れたことを喜んでいるのである。

ルヴェルの作品では、今一々数えあげるの煩(はん)を避けるが、一つとしてうれしくないものはない。私はルヴェルの書くような小説を自分でも書いて見たいという年来の希望であるが、彼の作品を読むと、自分自身の筆があまりに見すぼらしくなって、穴へでもはいりたくなるくらいである。

次に短篇ではチェスタトンが好きである。最もチェスタトンの英語は、どういうものかポオの英語のように、私に迫って来ない。これは勿論私の英語の力が足らぬためでもあろうから「不足」はいえぬが、とにかく、師父ブラウンの出て来る短篇と The man who knew too much. に収められた作品は、何ともいえぬ、いい味がある。

次には、ダヴィソン・ポーストやビーストンの作品が、私にとって頗(すこぶ)るうれしいものである。ビーストンの作品を読むときは、一たいこんどは作者がどういう「オチ」をつけるだろうかと少なからぬ好奇心にかられる。そしていつも終りに至って一ぱい喰わされる。だまされて喜ぶなんて、探偵小説の愛読者なんかになるものではないなどと考えながらも、やはり引きつけられてしまう。

英国に居る時分、私はドイルとフリーマンの作品に気狂いになっていたが、近頃はあまり読まない。しかし、嫌いになった訳ではなくて、みんな内容を知っているからである。（ポオやルヴェルは内容を知っておっても読まずにおられない。）シャーロック・ホームズの冒険、記念、帰国の三集に収められた物語のプロットにはいつも感心する。この三集だけは、当分のうちは探偵小説界にその燦然たる光を失わないであろう。

私は軽いユーモアに充ちた作品よりも、いわば凄みを帯んだユーモアを持った作品が好きである。だからポオの The Tell-Tale Heart. の如きものが、喰いつきたいほど好きである。これに反してルブランやマッカレーあたりのユーモアは、面白いとは思っても、それに耽溺するほどにはなれない。それにもかかわらずオルチーのユーモアはたまらなくいい。しかし、何故(なにゆえ)かといってきかれたとて答えら

れる訳のものではない。

アメリカに居る時分、毎晩 Detective Story Magazine を読んで、決して読み残しはしなかったものだが、近頃はこの雑誌と英国の Detective Magazine とを取っていながら、一月に三篇か四篇ぐらいずつしか拾い読みが出来なくなってしまった。ことに近ごろ、下手の横好きで創作を始めたら、尚更読む暇がないのに困ってしまった。だから、新らしい作家に関しては自分の知識は甚だ乏しいのである。

長篇では、何といってもオルチーのスカーレット・ピンパーネル叢書が一ばん好きである。しかし、オルチー夫人の筆は少し長すぎはしないかと思っている。もう少しきりつめればきりつめられぬことはなさそうに思うが、ああいうのが英国人に向くのかも知れない。同じく長過ぎるとは思っても、コリンスの作品はそんなに気にならずに読んで行ける。「白衣の女」など、長いところに面白味があるように思われる。

ドウーゼもかなり好きであって、彼の長篇六つは非常な興味を持って読み、六篇とも追々翻訳して公にするつもりであるが、何度も何度も繰返して読む程の熱はない。一般に探偵小説の長篇で、何度読んでも飽かないというようなのは滅多にないもので、やはり探偵小説は、短篇に生命があるように思われる。

ドイツや北欧の探偵小説も相当に読んだけれども、ドウーゼを除いては、これといういいものにはぶつからない。もっとも私の読んでいない作家にすぐれた作品があるかも知れぬが、探偵小説はやはり英米仏にとどめを刺すようである。

何だか、表題にふさわしくないようなことを書いてしまったが、要するに私の一番好きなのはポオとルヴェルである。

（「新青年」大正十四年夏季増刊号）

青空文庫情報

底本：「探偵クラブ　人工心臓」国書刊行会
　　1994（平成6）年9月20日初版第1刷発行
初出：「新青年」博文館
　　1925（大正14）年夏季増刊号
入力：川山隆
校正：門田裕志
2007年8月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ポオとルヴェル

小酒井不木

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/